

大悟法条里跡池ノ下地区
福島遺跡入垣地区
長者屋敷遺跡

2000年度 中津地区遺跡群発掘調査概報(XIII)
中津市文化財調査報告 第25集

2001

中津市教育委員会

例　　言

一、本書は中津市教育委員会が2000年度に実施した中津地区遺跡群発掘調査事業の調査概報である。

一、調査は2000年度国宝重要文化財等保存整備事業費及び2000年度大分県文化財保存事業費の補助を受けて実施した。

、調査団の構成は下記のとおりである。

、調査主体　中津市教育委員会

調査責任者　前田 佳毅（中津市教育委員会教育長 平成13年1月31日まで）
於久 孝正（中津市教育委員会教育長職務代行者管理課長
平成13年2月1日から）

調査指導　賀川 光夫（別府大学名誉教授）

小田富士雄（福岡大学教授）

後藤 宗俊（別府大学教授）

真野 和夫（大分県立歴史博物館副館長）

調査事務　尾畠 豊彦（中津市教育委員会市民文化センター館長）

田中布由彦（同 係長）

宮田 修司（同 主任）

調査員　渋谷 忠章（大分県教育委員会課長補佐）

調査担当　高崎 章子（中津市教育委員会市民文化センター主査）

花崎 徹（同 主任）

上記のほか、小柳和宏氏（大分県教育委員会文化課主査）に現地にて有益な御助言、御指導を賜った。

一、遺物の整理は岩崎弘子、中島二三恵（中津市歴史民俗資料館）が行った。

一、空中写真は（株）スカイサーベイに委託した。

一、トレースは金丸孝子（中津市歴史民俗資料館）が行った。

一、遺物の実測、写真撮影は高崎、花崎が行った。

一、本書の執筆、編集は第1章、第2章、第3章を花崎が、第4章を高崎が行った。

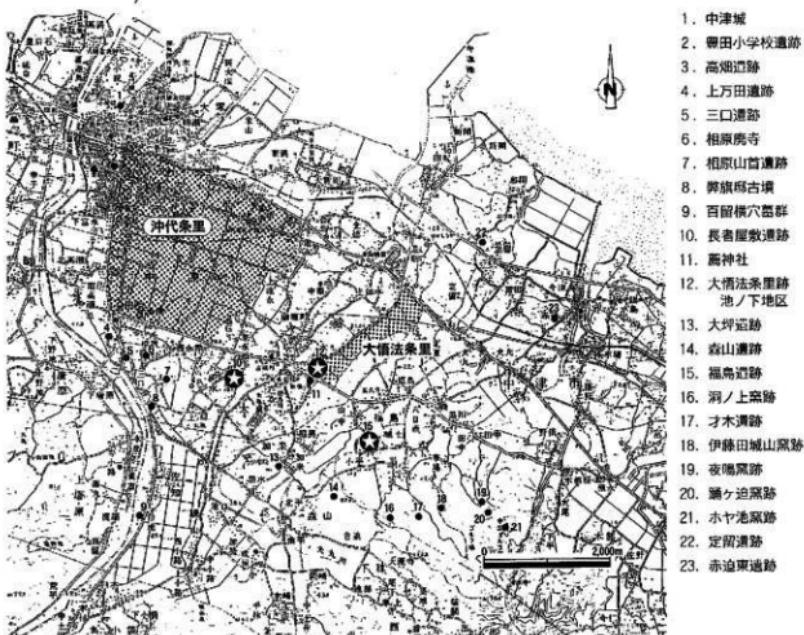
一、現場作業は下記の皆さんによる。

泉 貞世、今永キク子、植山京子、植山トミ子、植山ヨシカ、辛島雅美、黒川みゆき、
黒川洋美、田原文子、寺内勝美、徳永賀子、松本 獻、山縣信大

目 次

第1章 地理と歴史的環境	1
第2章 大悟法条里跡池ノ下地区	2
1. 調査に至る経緯	3
2. 調査の概要	4
3. まとめ	5
第3章 福島遺跡入垣地区	6
1. 調査に至る経緯	6
2. 調査の概要	8
3. 溝状造構	8
4. まとめ	10
第4章 長者屋敷遺跡	11
1. 調査に至る経緯	11
2. 調査の概要	12
3. 造構と遺物	12
4. まとめ	16
図版 1	17
図版 2	18
図版 3	19
図版 4	20
図版 5	21

第1章 地理と歴史的環境



第1図 中津地方遺跡分布図

中津市は大分県の北部に位置する中核都市である。人口約67,500人、市域面積55.67km²を有する。地形は平野と洪積台地とに大別される。ここで中津の主要遺跡を概観してみることにする。

旧石器時代の遺跡は発掘例が少ない。17の才木遺跡で剥片石器が出上している。

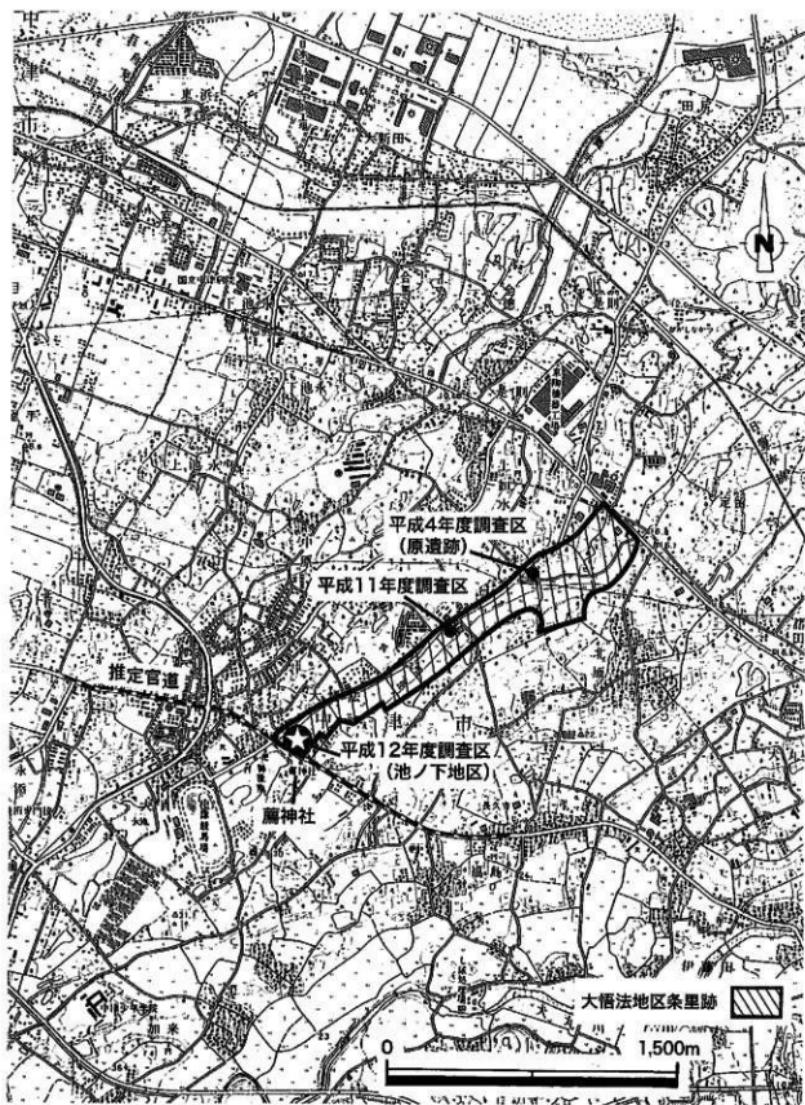
縄文時代の遺跡は多くが後期に属する。3の高畠遺跡、棒垣遺跡などがあげられる。縄文時代の遺跡の多くは、洪積台地上に立地する。

弥生時代の遺跡は14の森山遺跡、15の福島遺跡などがあげられる。森山遺跡は比高差40mの丘陵上に立地する集落遺跡である。

古墳時代の遺跡は7の相原山首遺跡、18~21までの野依伊藤田窯跡群などがあげられる。集落は台地上、自然堤防上や微高地にも分布する。窯跡では須恵器、須恵質瓦の生産が認められる。

白鳳時代から奈良時代にかけての遺跡は沖代条里、10の長者屋敷遺跡、22の定留遺跡などがあげられる。沖代条里は現在もその景観を残し中津の米蔵といえる。

第2章 大悟法条里跡池ノ下地区



第2図 大悟法地区条里跡周辺図



第3図 池ノ下地区周辺図

1. 調査に至る経緯

大悟法条甲跡は、中津市のはば中央部に位置する。標高約20m程の台地上で、周辺には弥生、古墳時代の遺物包藏地として周知される上如水遺跡、北原遺跡などが立地する。大悟法条里において近年発掘調査が行われている。平成4年度に開発による調査が行われた。ここでは、縄文時代の陥し穴2基、古墳時代後期の竪穴住居4軒、掘立柱建物3棟、などが検出され原遺跡として周知される。また平成11年度にも、開発に伴う確認調査が行われた。この地点では水田の畔をなすと思われる2条の溝が検出された。しかし、これ以外に遺構は検出されず、開発が遺構面まで達しない事から本調査には至らなかった。平成12年度、大悟法条里において、個人店舗建設に伴い、中津市教育委員会では確認調査を行うこととなった。この地点は、条甲の最南端にあたり、古代の官道(推定)、また宇佐神宮の祖宮と伝えられる嵐神社に隣接する。

2. 調査の概要

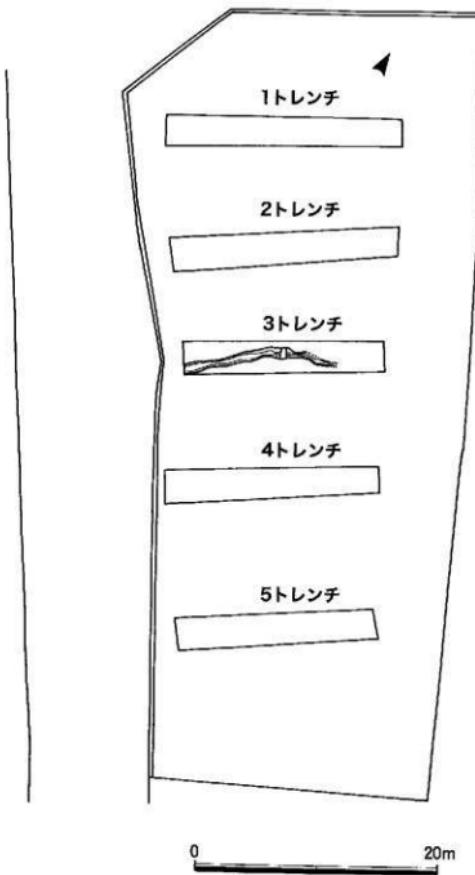
調査区内に5本のトレンチ(第4図)を設定し、重機により掘削を行った。表土より1m程で青灰白色の地山になる。地下水位が高い強湿地で、トレンチは常に水が溜まる状態であった。出土遺物はほとんどなく、溝を1条検出したのみであった。

トレンチ土層

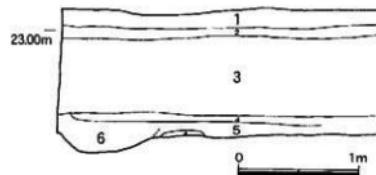
第5図は3トレンチの西側の上層になる。1は現耕作土で褐色。2は明褐色の土層、3は暗褐色で、酸化鉄の集積が確認できる。4は灰色の砂層。5は黒褐色の粘質土である。この層より十数点の遺物が検出された。6も黒褐色の土層で5と分層難であった。

黒褐色土層出土遺物

第6図は黒褐色土層から出土した遺物である。1は甕の頸部になる。2条の突帯を巡らすと思われる。内外面ともハケ目を施す。2は甕の口縁部になると思われる。上外方にのび、端部は丸みをもつ。3は瓦質土器の椀の底部になる。復元底径7.2cmを測る。高台は断面逆三角形、端部は丸みをもつ。外面に指押さえを施す。4も瓦質土器の椀になると思われる。高台は断面方形。内面に指押さえを施す。



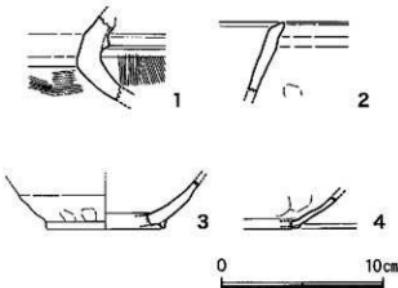
第4図 池ノ下地区トレンチ配置図



第5図 3トレンチ土層図

3.まとめ

今回の調査区からは、溝一条が検出されたのみであった。当初期待された、古代の官道、薦神社に関連する遺構は検出されなかった。周辺の状況から水田に関するものと思われる。溝からの出土遺物は一点もなく、時期は不明である。しかし溝を検出した面は平成11年度調査区より下層になり、溝の検出面上層(前記の黒褐色土層)から中世以前の土器がわずかであるが出土した。平成11年度のものより時代は上がると思われる。調査区は盛上され開発が遺構面に達することができないため、本調査の必要はないものと判断し調査を終了した。

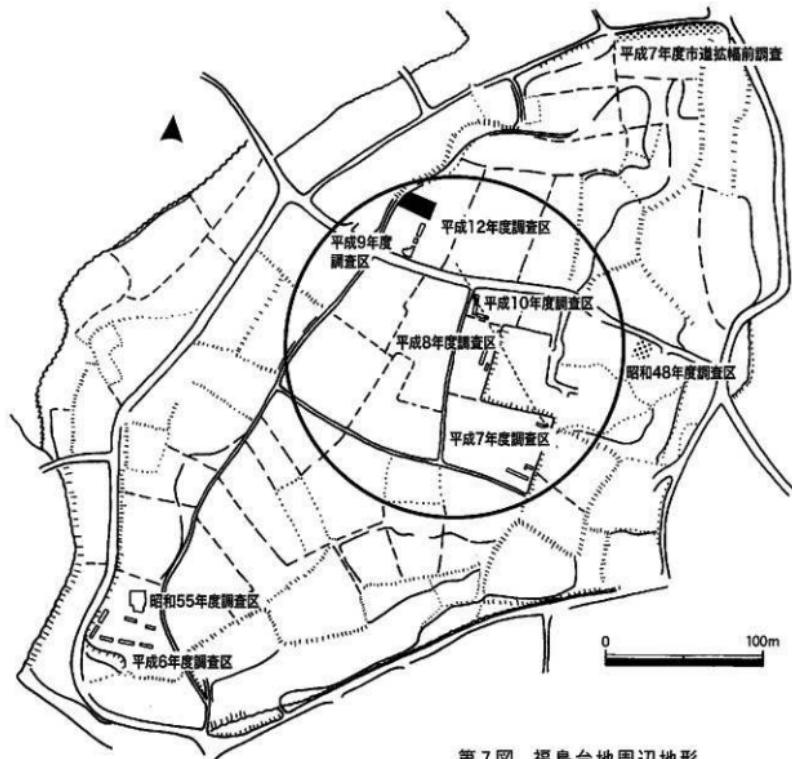


第6図 黒褐色土層出土遺物図



写真1 試掘風景

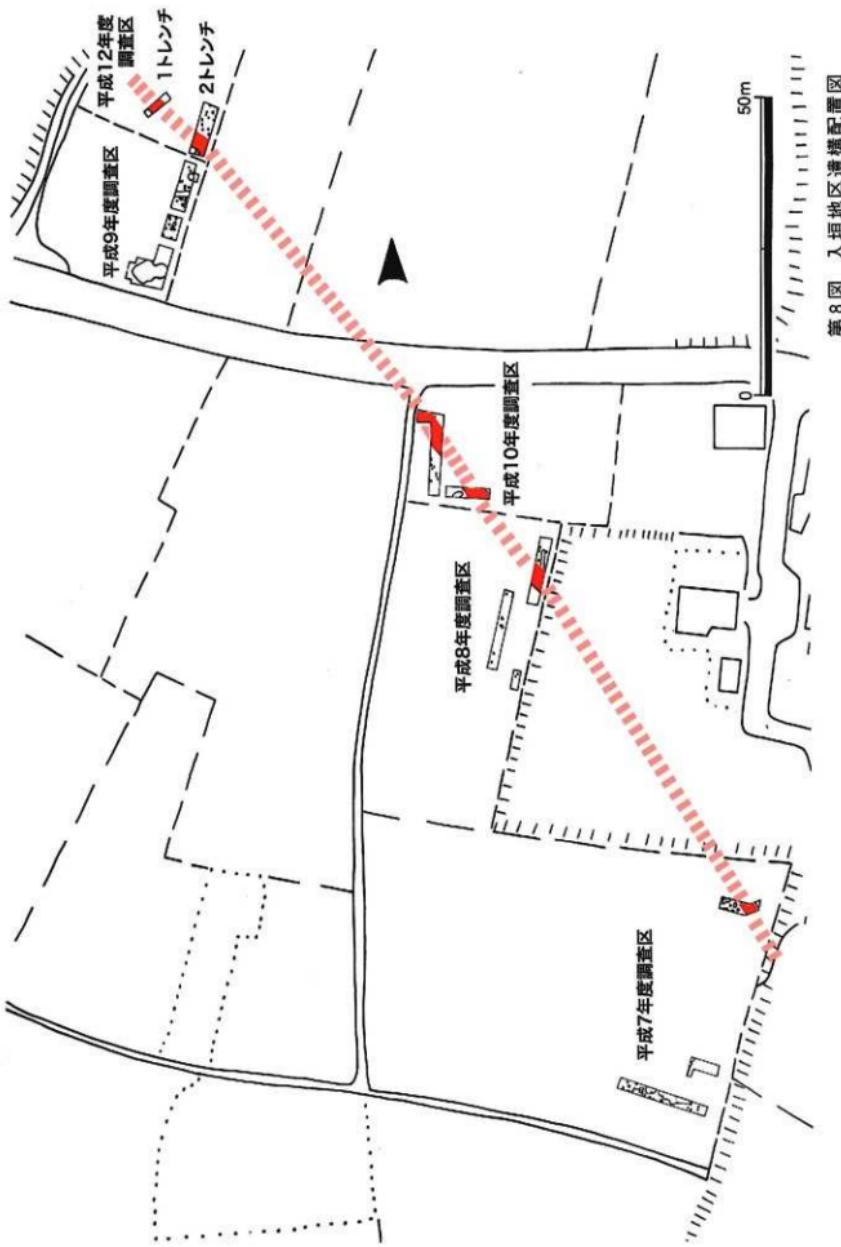
第3章 福島遺跡入垣地区



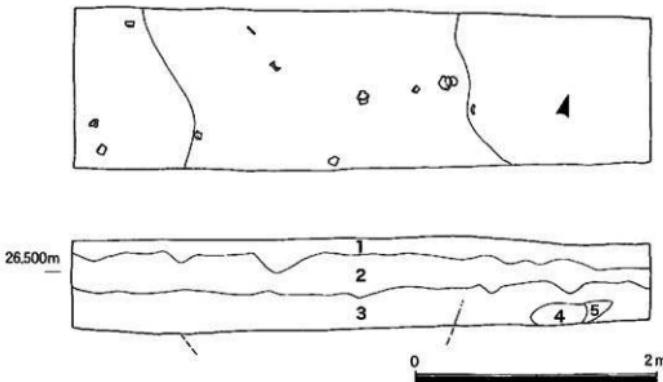
第7図 福島台地周辺地形

1. 調査に至る経緯

福島遺跡は、標高27m程の台地に立地する。台地の大半は畑地で、土器片などが容易に表探できる。近年この台地に個人住宅が建ち始め、台地の景観が変わりつつある。そこで中津市教育委員会では遺跡の広がりを確認し、遺跡保護を目的とした調査を平成6年度より5回実施している。平成7年度調査区から弥生時代中期の溝1条を検出した。そこで平成8年度、9年度、10年度の3ヶ年はこの溝の性格を調査するために、溝の進行方向に向けてトレンチを設定した。その結果平成8年度と10年度でこの溝の続きを検出した。平成7年度調査区から10年度調査区まで直線で約100m溝は続くと思われる。溝はさらに北西方向に進むと思われた。そこで、今年度は平成9年度調査区の北側にトレンチを設定し、調査を行うことにした。



第8図 入垣地区遭構配置図



第9図 1トレンチ平面図、土層図

2. 調査の概要

調査区に2本のトレンチを設定し、表土より手掘りで掘り下げた。第9図は1トレンチの平面図である。中央に黒褐色の遺構が北西に進む。これは掘り下げていないが、溝状になると思われる。遺構検出面より上方で出土した土器を取り上げた。2トレンチからピット状遺構・基盤、溝状遺構を1条検出した。溝は一部を掘り下げ遺物を取り上げた。

トレンチ土層

第9図は1トレンチの土層図である。1は褐色の表土である。2は明褐色でややしまる。1, 2はわずかに古代から中世に至る上器片を含む。3は黒褐色の土層である。弱粘質で、縄文から中世に至る土器片を多く検出する。4, 5は赤褐色の焼上と思われる。3層より下は黄褐色の地山となり、遺構検出面となる。

3. 溝状遺構

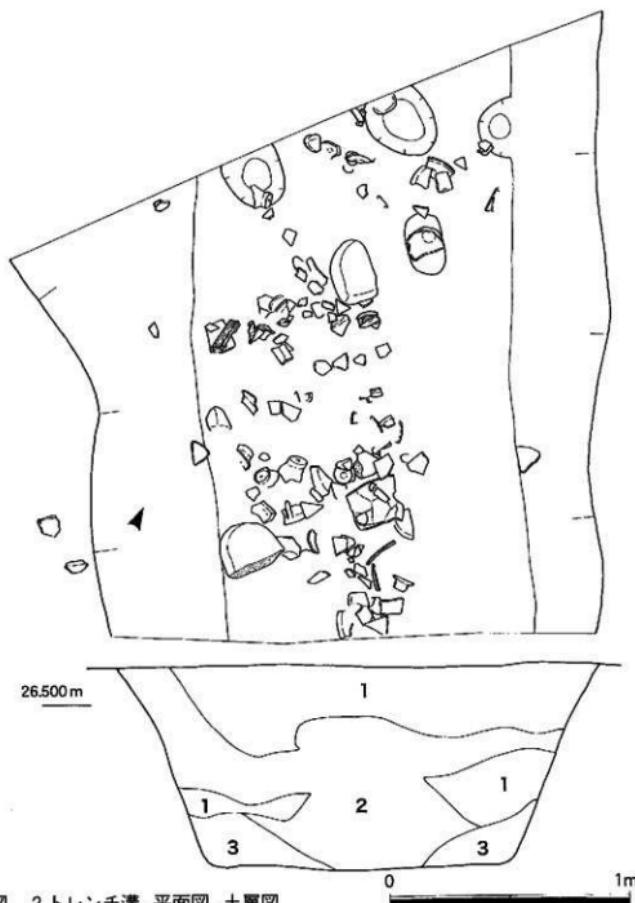
1トレンチと2トレンチから溝を検出した。2トレンチの溝は一部、底まで掘り下げた。溝の幅は約200cmで、深さは約80cmである。溝の断面は逆台形である。両トレンチの溝はつながり、さらに北西方向に進むと思われる。

溝の埋土

第10図は溝の土層図である。1は黒褐色で弱粘質である。2は暗褐色土、3は黄色土を含む黒褐色土層である。1, 2層から弥生上器が検出された。

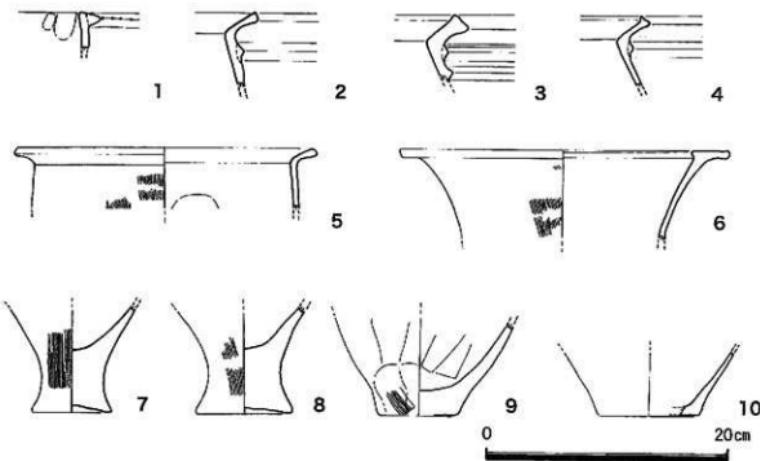
溝出土遺物

第11図は溝の出土遺物である。1は甕の口縁部になる。口縁部が短く折れ断面三角形状をなす。口縁端部に刻み目を施す。亀ノ甲様式に酷似する。2は口縁部を『く』字に外反させる甕になる。



第10図 2トレンチ溝、平面図、土層図

口縁直下に1条の三角突帯をはりつける。3も口縁部を『く』字に外反させる壺になる。口縁部直下に2条の三角突帯をはりつける。口縁端部はやや張りだし若干上方にのびる。4も口縁部を『く』字に外反させる壺になる。口縁直下に1条の三角突帯をはりつける。11縁先端部を上方に跳ね上げる。5も口縁部を『く』字に外反させる壺になる。復元口径24.6cmを測る。外面にハケ目を施す。2、3、4、5は城ノ越系のものになると思われる。6は口縁部をやや外反する壺になると思われる。口縁端部は内側に張り出す錐先状になる。復元口径20.8cmを測る。7、8は壺の底部になる。7は底径6.6cmを測る。8は底径7.6cm。丁寧なつくりに思われる。7、8ともやや上底で、外面にハケ目を施す。9は壺の底部か。底径6.6cmを測る。平底で、外面に粗いハケ目を施す。10は壺の底部になると思われる。復元底径8.3cm、平底である。



第11図 溝出土遺物

4.まとめ

今回の調査では、2本のトレンチを設定し溝を検出することができた。溝は形態、埋土、出土遺物などから、平成7年度より探索してきた溝の続きである。今年度までの調査でこの溝について確認できたことは、溝はほぼ直線で約160m程続く。溝からは、弥生時代中期の土器片が検出される。溝より南側ではほぼ同時期の遺構(竪穴住居、土壙など)が検出される。溝は今年度調査区よりさらに北西に進む。

しかし、今年度調査区より西側は、削平により遺跡の確認はできない。また平成7年度調査区より東側も同様、台地は削平を受ける。今後は台地の中央に調査区を広げ、遺跡の全容の解明に努め、開発への対策の資料としたい。

(参考文献)

『沖代地区条里跡、福島遺跡東入垣地区』 中津地区遺跡群発掘調査概報VII

中津市教育委員会

『福島遺跡入垣地区、定留遺跡向地区』 中津地区遺跡群発掘調査概報X

中津市教育委員会

『福島遺跡東入垣地区、定留遺跡八反ガソウ地区』 中津地区遺跡群発掘調査概報XI

中津市教育委員会

第4章 長者屋敷遺跡

1. 調査にいたる経緯

長者屋敷遺跡は中津市大字永添に立地する。平成7年度、市営住宅建て替えに伴い、市の単費で調査を行った結果発見された遺跡である。大型の掘立柱建物群が11棟、溝、柵列、土壙などが検出され、8世紀～10世紀にかけての土器と、大量の炭化米等が出土した。掘立柱建物はいずれも大型で、側柱建物と縦柱建物が北を指向し整然と並んでいた。建物の形態、炭化米、硯や墨書き土器などの出土から、遺跡は古代下毛郡衙正倉と推定されるに至った。

翌年の8年度には、7年度調査区の南側で寺院の建設設計画が持ち上がり、急遽試掘調査を行ったところ、遺跡の南限と考えられる東西方向の溝を検出した。7年度調査区は建物群を90m四方の範囲で溝が囲んでいると思われ、8年度調査区の南限溝までの間にも、もう一つ、90m四方ほどの空間をとることが可能である。現時点では、二つの区画が南北に並んで存在していたと考えている。



第12図 調査区配置図 (1/2500)



写真2 7年度調査区 挖立柱建物群

遺跡は南から北へ伸びる舌状台地の突端にあり、7年度調査区のすぐ北側では、台地はゆるやかに下っており、それより先には遺跡の連続は考えにくい。また、西側は細長い谷地形で、明確な段落ちを有す。北、西、南の三方の限界はおさえることができ、課題は残る東限のみとなった。台地の東側も西側同様細長い谷地形となっており、7年度調査区から東へ約100mほどの空間がある。ここに7年度調査区みなみの90m四方の区画が存在するのか、それとも遺跡は台地の西側のみに展開するのか、遺跡の範囲を確定する必要性があることから、国庫補助事業により重要遺跡確認調査を実施することとした。

2. 調査の概要

台地の東側に、約5,000m²の広さをもつ空き地がある。将来宅地にするため、整地されており、一面にまさ上がしかれていた。平成12年6月、土地所有者の了解を得て、発掘調査を開始した。

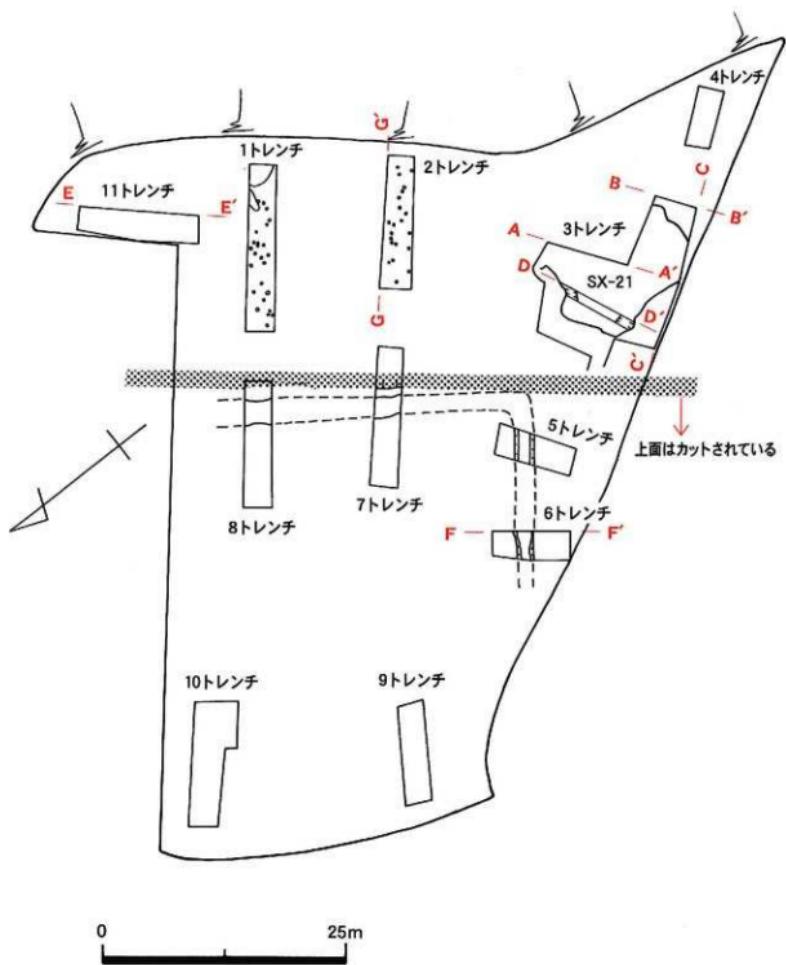
現地は標高30mほどの平坦な土地である。東の谷とは1.5~2mほどの比高差をもつが、これは戦後作られた地形であった。本来、調査区の中程から東へ向かって傾斜していた土地を、畑にするために西側を削り、東側へ土を移動させて平滑にし、谷との段差が明確になったものである。

調査区西側が削平されたと聞き、遺構の検出は東側に期待することとなった。調査は重機によるトレンチ掘りで行った。全部で11本の調査区を設定した。聞き取りを裏付けるように、調査区の西2/3は旧地表面が削られ、深さ約80cmほどで山肌が現れた。ピットひとつなく、遺物も検出できなかった。ここでも神戸製鋼時代と思われる、コンクリートの建物基礎や、深くえぐられたゴミ捨て穴が出土した。ただ、中世以降の溝SD-15を検出することができた。古代の遺構はやはり東側で確認できた。第1トレンチ、第2トレンチの北端では地表面より約1mで遺構面に到達したが、そのまま傾斜し、南端では深さ約1.5mまで達した。トレンチ内全体に古代と思われる黒色のピットが点在していた。第3トレンチでは古代の大きな土壠SX-21を検出した。1、2、4トレンチで古代の溝の存在を期待したが、確認にはいたらなかった。

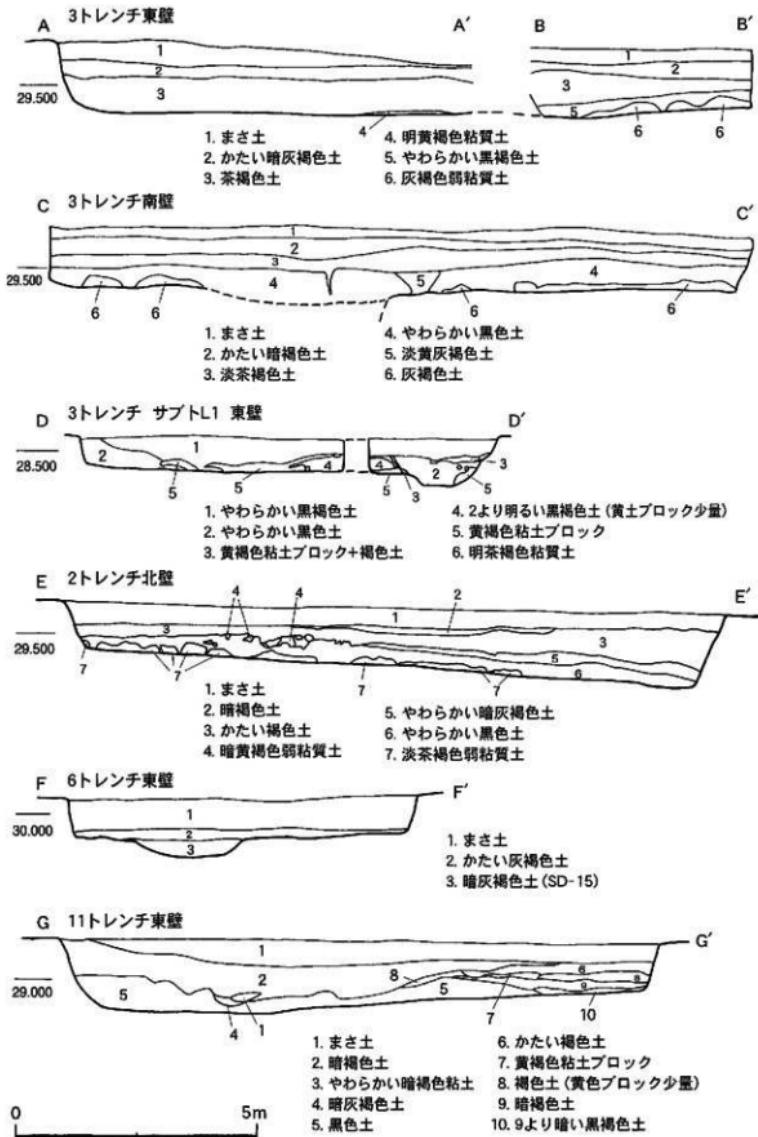
3. 遺構と遺物

(1) 土壠

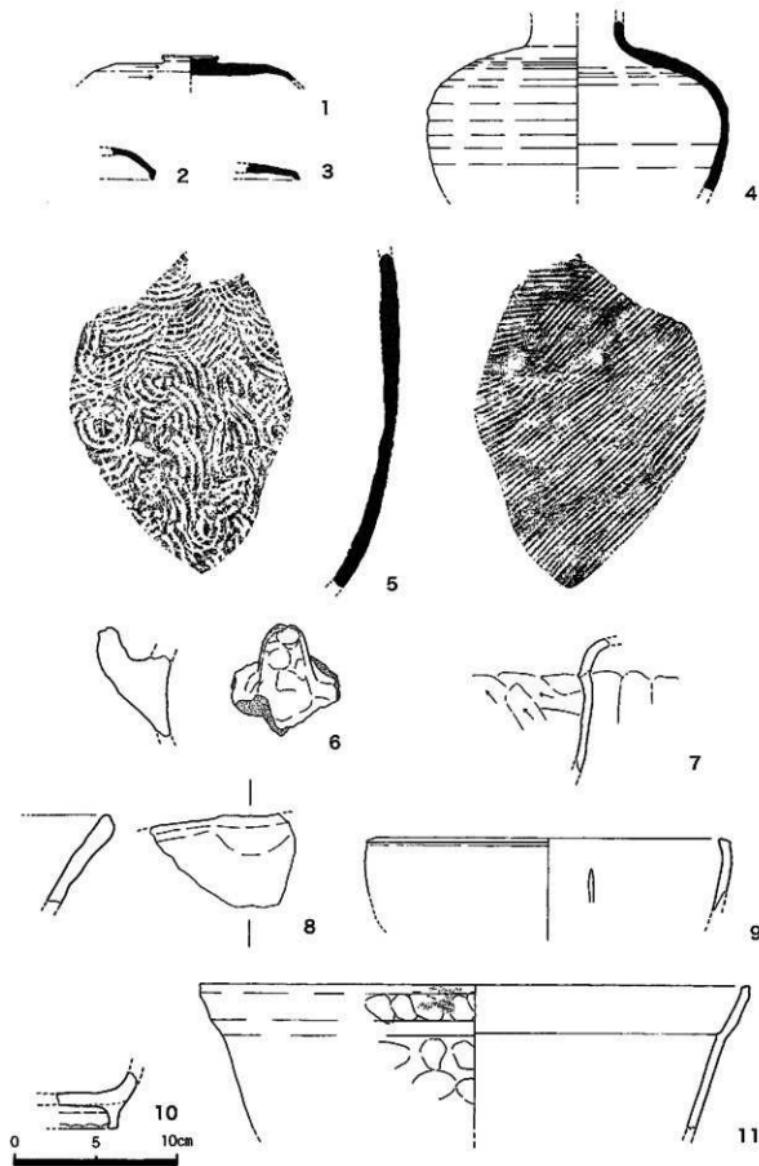
第3トレンチでは深さ約1mほどで大きな遺構SX-21を検出し、トレンチを拡張した。トレンチの南端では地表面から遺構面までの深さは約1.5mに達した。掘りあげた土の量も多く、梅雨時期で壁の崩落のおそれもあったため、遺構の全形は未確認であるが、これ以上の拡張は断念した。遺構の埋土は黒色で、周囲にやはり黒色のピットが数個確認できた。遺構内に東西方向に幅80cm、長



第13図 平成12年度調査区平面図 (1/500)



第14図 2、3、6、11トレンチ土層図 (1/100)



第15図 SX-21、SD-15 出土遺物実測図 (1/3)

さ8.6mのトレーナーをいた。水位が高く常時水中ポンプで水揚げが必要な状態であった。SX-21のトレーナー内の床面は平坦で、両端に窪みがあった。土層上層に黒色土、下層に地山の黄褐色粘土ブロックが多數混入していた。SX-21の土層、平面形は、7年度調査区のSX-1を思いおこさせた。SX-1の床面には、土をとったあとのような凹凸があり、SX-21の床面の窪みもそれに共通するものかもしれない。

第15図1～7はSX-21のトレーナー出土遺物である。いずれもトレーナーの上層から出土した。1～3は須恵器壺蓋。1は凹型の扁平なつまみを持ち、天井部は回転へら削り後未調整。内面は丁寧にならされている。8世紀前半か。2は天井部が高く口縁端部は三角にとがる。8世紀でも前半におさまるのではないか。3は低平であることから8世紀後半～9世紀初頭とした。4は須恵器壺は脇部最大径は18.9cm。焼成不良で白っぽく軟質である。5は須恵器甕胴部。内面に同心円の当て具痕、外側は平行叩き。淡灰色。6は土師器瓢取っ手。指頭痕が多数ある。7は土師器甕で、外側は縦方向強めの撫で、内側は横方向に強めに撫である。以上の遺物より、SX-21を8世紀後半～9世紀初頭の遺構と判断した。

(2) 溝

第5、6、7、8トレーナーから地表面より約0.8mで幅約2mの溝が検出された。7、8トレーナーでは遺構の検出にとどめ、5、6トレーナーでは完掘した。しかし、溝は非常に浅く、深さ約25cmであった。埋土は堅い暗灰褐色土で、床面は平坦だった。第5トレーナーの南で山がり7トレーナーへつながる同一の溝と考えられる。地山は赤い山肌をみせており、後世に削平をうけている。溝ももっと深さがあったものが、上部が削られ、床面が残ったものであろう。溝からは近世の播り鉢のほかに、ガラスのインク瓶も出土した。溝が中世の八並城の遺構の可能性があるが、長年開いた状態で利用されていれば、古い遺構でも新しい遺物は混入するものであり、溝の成立年代は不明である。

第15図8～11は瓦質土器である。8は片口の鉢。内面横方向に刷毛目があり、器面は荒れている。9は体部が丸く内側する鉢である。内面に縦に一条の条痕がある。口径は22.8cm。10は鉢の底部。11はなべで、口縁部外側に炭化物が付着する。外側には指頭痕がめぐる。口径34.3cm。いずれも小片で時期判断はむずかしいが、16世紀以降のものと思われる。

4.まとめ

調査の結果、長者屋敷遺跡の遺構はSX-21のみであった。SX-21は7年度調査区SX-1に似た大型の土壌で、やはりごみ捨て穴と思われるが、炭化米は出ていない。トレーナーから上器が出土しており、上層の周辺に建物遺構が存在していたと思われる。しかし調査区西側は削平をうけ、ごつごつした山肌が露出しており、遺構は消滅したことが推測される。土地は東にいくほど低く傾斜しており、溝は確認できなかった。以上より、台地の東には7年度調査区のような90m四方の区画は存在しないと判断した。正倉に隣接して郡庁の存在を期待したが、台地東側には正倉に付属する施設や建物などが展開していたのではないだろうか。郡庁はより官道近くにあると思われる。今後さらに台地上の確認調査を続け、長者屋敷遺跡の全貌にせまりたい。なお長者屋敷遺跡の平成7年度、8年度調査の内容は、中津市文化財調査報告書第26集「長者屋敷遺跡」(2001)を参照されたい。

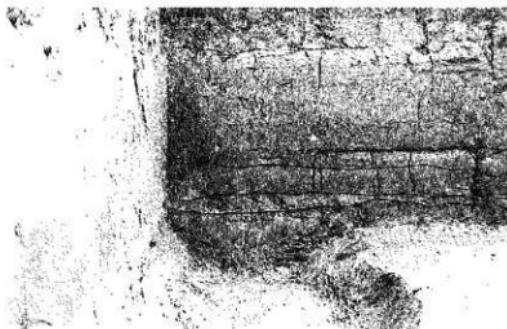
図版1

大悟法条里跡池ノ下地区

試掘風景



溝土層



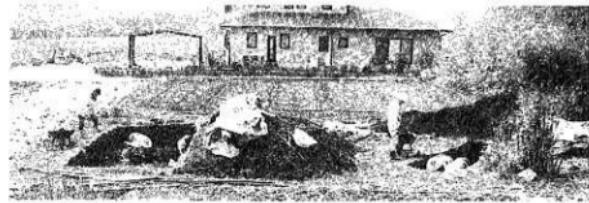
溝



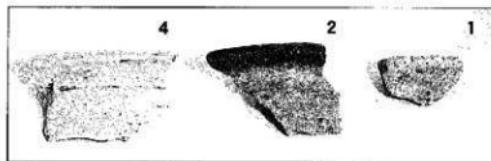
図版2

福島遺跡 入垣地区

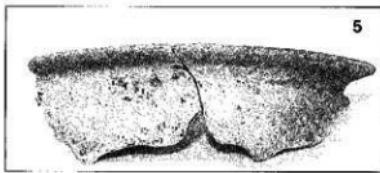
発掘風景



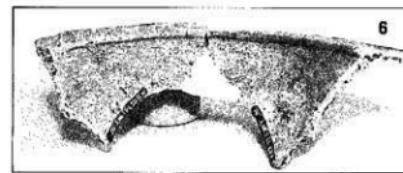
溝遺物出土状況



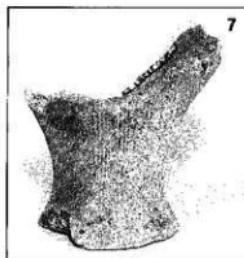
5



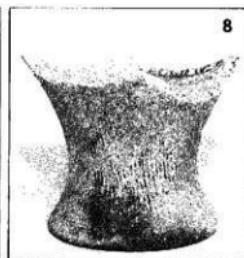
6



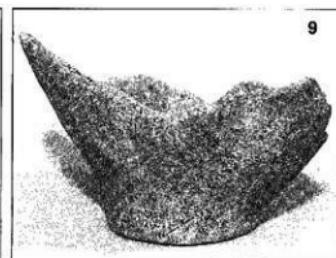
7



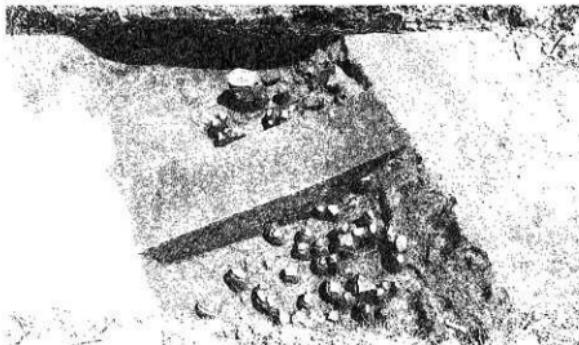
8



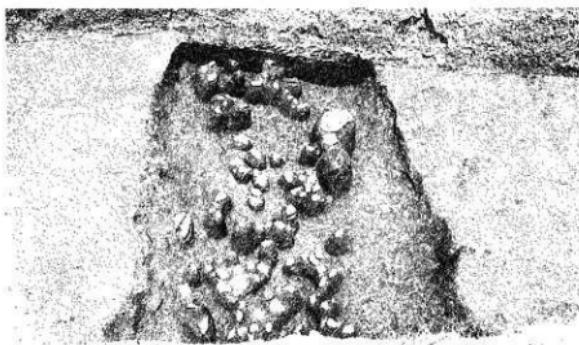
9



図版3 長者屋敷遺跡



第5トレンチ
SD-15



第6トレンチ
SD-15

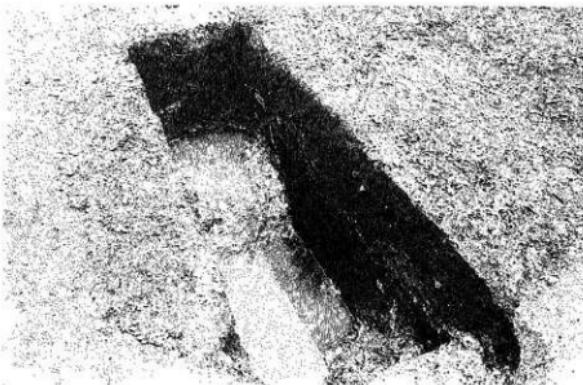


長者屋敷遺跡全景

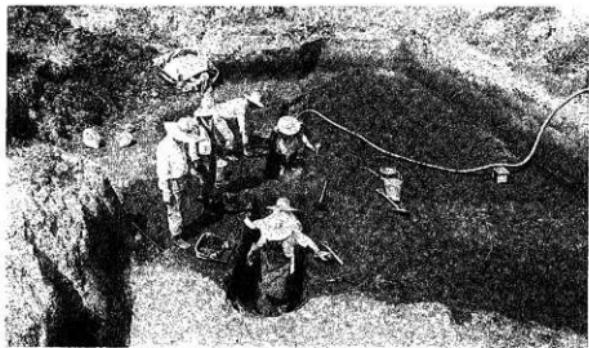
図版4 長者屋敷遺跡



SX-21

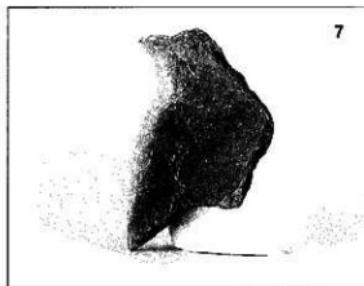
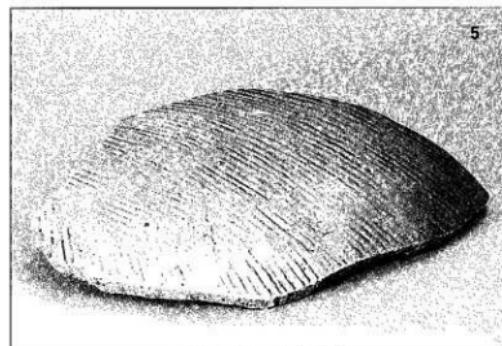
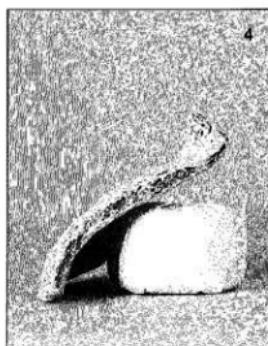
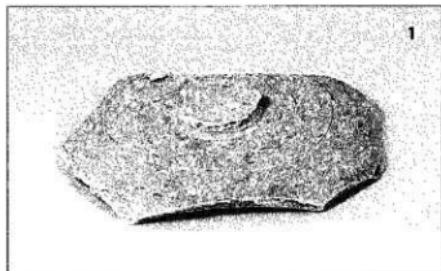


SX-21
サブトレンチ



作業風景

圖版5 長者屋敷遺跡



報告書抄録

書名	大悟法条里跡池ノ下地区 福島遺跡入垣地区 長者屋敷遺跡
副書名	2000年度中津地区遺跡群発掘調査概報
卷次	(XIII)
シリーズ名	中津文化財調査報告
シリーズ番号	第25集
編集者名	高崎 章子 花崎 徹
編集機関	中津市教育委員会
所在地	大分県中津市豊田町14-3
発行年月日	2001年3月31日

所取遺跡名	所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	面積	調査原因
大悟法条里 池ノ下地区	大分県中津市 大字大悟法101 他	44203	101031	33° 33' 55"	131° 13' 14"	2000 0816 2000 0901	1532m ²	販売店舗 新築
福島遺跡 入垣地区	大分県中津市 大字福島1245	44203	101050	33° 33' 24"	131° 13' 52"	2001 0216 2001 0319	100m ²	遺跡範囲 確認
長者屋敷 遺跡	大分県中津市 大字永添2511-2	44203	10119	33° 33' 49"	131° 13' 30"	2000 0612 2000 0725	3300m ²	遺跡範囲 確認

所取遺跡名	種別	上な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大悟法条里 池ノ下地区	水田		溝		
福島遺跡 入垣地区	集落	弥生時代	溝	弥生土器	
長者屋敷 遺跡	官衙 城館	奈良 中世	土壙 溝	須恵器・土師器 瓦質土器	(八並城跡か)

大悟法条里跡池ノ下地区
福島遺跡入壇地区
長者屋敷遺跡

2000年度 中津地区遺跡群発掘調査概報
中津市文化財調査報告 第25集

2001年3月31日

発行 中津市教育委員会
印刷 株式会社原田印刷社